

宣教医ベッテルハイムの琉球王国宣教とその
イギリス帝国宣教史上の意義

渡邊, 公夫

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

46

(開始ページ / Start Page)

149

(終了ページ / End Page)

202

(発行年 / Year)

2019-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021742>

宣教医ベッテルハイムの琉球王国宣教と そのイギリス帝国宣教史上の意義

渡邊 公夫

はじめに

本論文は、一八四六年から、ペリー艦隊の来航まで、琉球に滞在し、イギリス王国教会の宣教師として活動したバーナード・ジャン・ベッテルハイム (Bettheim, Bernald Jean, 一八一—没年不明) という人物の言動を分析し、当時のイギリス帝国の宣教運動の一つの事例として彼の事績をとらえなおすことを目標とする。

現在の研究水準では、九年間という長期にわたる活動のなかで、彼は労多くして得るところが少なかったと認識されている。彼を派遣した琉球海軍伝道会は、ベッテルハイムの後一人の宣教師を琉球に派遣したが、現在に至る明確な宣教成果を残すことができず、消滅している。宣教の成果に限らず、

彼が直接に遺した影響の小ささから、彼が琉球で宣教活動をしたというエピソードは、琉球が日本に併合される激動の時代に至るまでの特殊な出来事とみなされている。琉球史の観点からみて、その見解は間違いではない。

しかし、彼を当時の「イギリス帝国の宣教師」の一人として見た時、琉球史、沖繩史の視点とは全く異なった観点から評価を下すことができる。すなわち、当時のイギリス帝国でおこなわれた宣教の実態を体現する人物として、彼は興味深い事例の一つだといえる。本論文では、この観点から、特に彼の信仰のあり方に注目して論じていく。

次に、彼が来琉に至るまでの経歴を簡潔に紹介する^①。

一八一一年 ハンガリーのレスブルグのユダヤ系商人の家に生まれる。ラビになるための学校に通う。

一八三六年 イタリアのパデユア大学で医学博士号を取得。中近東地域で軍医として数年間勤務。
一八四〇年 近東で、イギリス軍の軍医として従軍中、イングリランド国教会へと改宗。

改宗してからイギリス国籍を取得するまでにロンドンユダヤ人宣教会(London Jew's Society)に自分を近東地域のユダヤ人宣教に派遣するよう要請するが失敗。

一八四三年 イギリス人エリザベス・メアリ・バーリック(Berlick, Elizabeth Mary: 生没年不明)

と結婚、イギリス国籍取得。

一八四五年 琉球海軍伝道会の公募に応じて、採用。イギリス出立。香港で宣教師カール・ギュツラフ (Gützlaff, Karl Friedrich August, 1803-1851)⁽²⁾ に師事し、四月末日に琉球に到着。

なお、彼が琉球を出立するのは、一八五四年である。

ベッテルハイムが所属する琉球海軍伝道会は、イギリス海軍軍人の有志が立ち上げた民間団体である。彼らは、1816年に英国使節団の北京訪問に同行したアルセスト (Alveste) 号、ライアラ (Lyra) 号に乗り組んでいた海軍士官だった。両船は、英国使節団が北京で任を果たす間、東シナ海海域の調査を命じられ、琉球にも寄港していた。その際受けた恩義に報いるために組織された宣教団体であり、最大の出資者は海軍司令官でもあったマンチェスター公爵だった。基金に応募した人々の名簿を見てみると、伝道会の役員である海軍士官の妻子の名が集金者として書かれており、それぞれに募金者と募金額が書かれている。一八四三年二月九日から一八四九年二月九日までに集まった基金は約二二二八ポンド、寄付名義は二〇〇名義⁽³⁾だった。一八四九年二月九日から一八五〇年二月九日までは四一三名義から約四〇三ポンド集まった。このほかにも、ルカの福音書、使徒行伝の琉球語訳聖書出版のための特別基金が立ち上げられ、六四名義から約一七八ポンド集まっている⁽⁴⁾。一八五〇年二月九日

から一八五一年二月九日までは四一三名義から約二一五ポンド⁵⁾、一八五一年二月五日から一八五二年十二月三十一日までは三三六名義から七二九ポンド⁶⁾、一八五三年一月一日から十二月三十一日までは二九〇名義から約三六二ポンド、一八五四年一月一日から十二月三十一日までは二二九名義から約二八四ポンド集められている⁷⁾。寄付を寄せる会員数や寄付金が初期から拡大することがなく、琉球海軍伝道会の発起人であるジョン・クリフォード (Clifford, Herbert John, 1789-1855) が亡くなると同時に伝道会が解散したことを考えると、この団体はクリフォード個人の情熱と彼の海軍時代の人脈に支えられた私的な団体だったといえる。

ベッテルハイムはこの宣教団体に雇われ、琉球に派遣されたのだが、経歴から分かるように、彼は正式な牧師の資格は持っていない。それゆえに、彼が派遣されたのは、「宣教活動も出来る医師」としてであった。そうした背景を汲んで、タイトルは「英宣教医」とした⁸⁾。

しかし、彼の在任中新たな専任の牧師資格を持った宣教師が派遣されることはなく、彼自身も宣教活動に意欲的だったことから、彼は後世、自身も宣教師だった H・B・シュウォーツ (Schwartz, Henry Butler) によって、沖繩における初のプロテスタント宣教師として称揚されるにいたる。これに対し、オーティス・カリー (Cary, Ous) はベッテルハイムの宣教を失敗だったと結論付けた。シュウォーツの後任だったアール・ブル (Bull, Earl R.) が改めて宣教地の開拓者としてベッテルハイムを顕彰している⁹⁾。

戦後になり、ベッテルハイムの宣教の成果のみならず、医学や英語の教授における功績も否定したのがG・H・カー(Kerr, George H.)だった。彼はベッテルハイムの人格の問題を指摘し、さらにはベッテルハイムの琉球語能力自体を疑い、彼の報告はあたかも彼の活動がうまくいっているかのよう⑩に脚色されたものに過ぎないとまで批判している。

カーの評価を覆したのが照屋善彦である。照屋は当時未刊行だったベッテルハイムの手記と琉球王府の記録を分析の対象とし、ベッテルハイムの活動を客観的に叙述した^⑪。その中で、照屋はベッテルハイムの業績を再評価した。

ただ、従来のベッテルハイム研究は、彼と琉球王府の関係や、彼の琉球での活動自体の研究は充実しているものの、彼の宣教師としての信仰の時代的背景を考察する視点を欠いている。結論を先取りしてしまえば、彼は当時のイギリス帝国の宣教運動の潮流に影響される形で琉球に來たのであり、彼の琉球での言動にも彼が受けた当時の神学的、宗教的影響を見て取ることができるのである。そのために、本論文では、まず次章で現在のイギリス帝国の宣教師研究の動向とベッテルハイム研究の接点について論じる。この章で宣教師研究における福音主義思想の重要性を指摘し、ベッテルハイムを改宗させる契機となったことを指摘する。第二章ではベッテルハイムにとってのイギリスの重要性について論じる。すなわち、彼はイギリス帝国という後ろ盾を、「神の王国」を地上に実現するための手段として必要としていたということを指摘したい。第三章では、彼の信仰のあり方について、①福音主

義思想と②ユダヤ教からの改宗者という側面から論じ、その両者が融合して彼の言動の根拠となっていたことを明らかにする。

第一章…イギリス帝国史における宣教師研究

一九八〇年代まで、宣教師たちは、主に第三世界ナショナリズムの研究において、西洋列強による帝国主義の手先だと解釈されてきた。しかし、宣教師自身の信仰のあり方と布教姿勢の関係性という新たな視点を提示し、帝国と宣教師の関係を相対化したのが、イギリス帝国文化史における宣教師研究の新たな研究動向である。この研究動向を支える歴史家に、ブライアン・スタンリー (Stanley, Brian) とアンドルー・ポーター (Porter, Andrew) がいる。宣教師が政治的・文化的な帝国主義の主要な推進者であるとする目的史観を批判したのが、スタンリーの *Bible and the Flag* (一九九〇) だった。彼はこの著作で、一九・二〇世紀の各種民地における宣教師、植民地政府、本国政府、本国の宣教師協会の複雑な関係を比較史の形で呈示し、宣教の文脈・状況依存性を指摘した。¹²⁾ ポーターの *Religion versus Empire?* (二〇〇四) も、一七〇〇年から一九一四年までの宣教と帝国の複雑な関係を描き、単純に宣教師が帝国主義の尖兵であると論じることを戒めている。¹³⁾ 彼は、宣教師たちが「帝国主義の手先」として持続的に利用された可能性はない、とも指摘している。¹⁴⁾

これらの一連の修正主義に基づく研究は、宣教をする側、帝国を支配する側の多様性を指摘するこ

とで、宣教と帝国の関係を相対化するものである。宣教師たちは、独自の動機に基づいて布教活動を推進したのであり、原住民のみならず、本国政府、植民地政府、現地の商人と入植者、本国の宣教会とも対立・協調した。それゆえに、修正主義研究では、宣教師とこれらの関係者の間の相互作用が検討されることになる。¹⁵⁾

ただ、単に宣教師と帝国内部の諸要素の関係を論じるだけでは、一九世紀の帝国各地の宣教活動の多様性を指摘するにとどまってしまう。帝国各地の宣教活動に一貫した歴史叙述を与えるために、修正主義研究者が重視するのが、本国における神学上の潮流だった。¹⁶⁾ ボイド・ヒルトン (Hilton, Boyd) は、一九世紀前半、後半で神学の潮流が変化したことを指摘している。一九世紀前半のイギリスで支配的だったのは、「穏健な福音主義」、すなわち現実世界において、人間の努力によって漸進的な倫理の向上が可能であるという楽観的な希望を抱くものだった。¹⁷⁾ 一九世紀前半の宣教師たちの活動を分析する際に、「穏健な福音主義」の観点から論じるのが修正主義研究の歴史叙述の立場である。

「穏健な福音主義」の思想的な背景には、後千年王国思想がある。すなわち、キリストの再臨は、神の王国が建設された後に起こると考える立場である。後千年王国思想の持ち主は、神の王国の建設が、人間の努力による漸進的な倫理の向上によって達成されると考えていた。¹⁸⁾ フランス革命、ナポレオン戦争のとき、イギリス社会では聖書で描かれる黙示録の預言への関心が高まった。¹⁹⁾ ナポレオン戦争に勝利すると、今度はイギリス帝国こそが地上に神の王国を建設する上で大きな役割を果たすのだ

という自己認識が芽生えた。²⁰⁾一八四〇年代までの、宣教師は狂信者と大して変わらないというイギリス社会における風潮は、一八五〇年代には改善された。すなわち、宣教師が社会的にまともな存在と見なされるようになり、中・上流階級の人々からの支援を受けられるようになったのである。²¹⁾こうした意識のもとで、宣教熱が高まりを見せ、民間団体が主体となって宣教活動が推進された。²²⁾また、漸進的に全世界的な倫理的向上を目指すという立場は、通商圏の拡大、英語教育、病院建設、奴隷解放などの、世俗的な文明化と福音宣教が両立するという立場でもあった。²³⁾特に、奴隷解放運動は一九世紀前半の福音主義者にとって重要な関心であり続けた。

後述するように、奴隷解放というテーマが福音主義者に訴求力があることは、ベッテルハイムも了解しており、彼の言説の一つの柱になっている。加えて、「神の王国」の建設という観点から重視されたのが、ユダヤ人に対する宣教運動だった。ベッテルハイムが改宗した当時、旧約聖書という共通の聖典を持つユダヤ教徒のキリスト教化の進展こそが、神の再臨の時期を推し量る格好の目印であると認識されていた。²⁴⁾すなわち、中近東に在住するユダヤ教徒を改宗させることは、それだけ神の再臨を招くことに等しいと思われていた。その意味で、ベッテルハイムは当時の福音主義者の成果の一人であり、彼自身その目標を内面化していたことは、最初の志望先がロンドンユダヤ人宣教会でのユダヤ人改宗運動だったことからうかがえる。

この、修正主義の立場からベッテルハイムの事例を分析したのが、ロバート・フレッチャー(Fletcher、

Robert S. G.) だった。彼は、琉球海軍伝道会がイギリス海軍士官の自発的活動によって生まれた点を重視し、東アジアにおけるイギリス帝国拡大の文脈にベッテルハイムの事例を位置づけた。来琉する異国船と琉球王府との交渉現場におけるベッテルハイムの役割を高く評価し、とくにペリー艦隊に与えた影響を重視した。すなわち、ベッテルハイムの活動はイギリス帝国の枠組みにとどまるものではなく、当時の東アジアにおける海洋ネットワークの一つの結節点として機能していたという視点を提示したのである。⁽⁹⁾

しかし、フレッチャーの研究は、ベッテルハイムの「ユダヤ教からの改宗者」としてのアイデンティティを軽視している。そのために、彼の旧約聖書を重視する布教姿勢や、琉球への政治的介入を訴える際の論理展開の独自性を見落としてしまっている。そもそもベッテルハイムが最初に志望したのはユダヤ人への宣教であり、来琉してからは現地の人々を「失われたユダヤ氏族」の末裔であると主張し、彼らに対する自らの宣教師としての適性を訴えた。いうなれば、ベッテルハイムは、イギリス本土の宗教的熱情の成果であると同時に、自らもその熱情を再生産する主体だったといえる。その意味で、ベッテルハイムの言動を分析することは、当時のイギリス帝国の宣教師運動の実態の一端を明らかにすることにほかならない。

第二章…ベッテルハイムとイギリス

ベッテルハイムは、冒頭で紹介したように、ユダヤ系ハンガリー人だった。彼がイギリス本土で生きた期間は二年に満たない。そうでありながら、彼はイギリス国籍を取得し、イギリスの宣教団体での活動を志望し、最終的に琉球海軍伝道会の募集に応じて来琉した。そして、後述するように、彼は植民地主義者と見紛うばかりの主張を繰り広げた。しかし、琉球を撤退した後、彼は一度としてイギリス本土に足を踏み入れることはなかった。一見矛盾するような彼のこうしたイギリスへの態度を分析するのが本章の目的である。

彼は来琉直前の中国大陸において、琉球で身の危険にさらされた時の用心にどのような自衛策を講じているかと友人に聞かれ、自分がまったく武器を持ち込むことを考えていないことを教えると、非常に驚かれたことを記事にしている。彼は、信仰の徒である自分には神の加護があることを誇り、神の言葉、すなわち聖書があれば十分であると記述している。²⁶⁾

しかし、彼が琉球での宣教活動を開始すると、様々な妨害に直面した。琉球王府は彼を常に監視し、彼が外出する際には常に護衛と称して役人を張り付け、市井の人々との接触を禁じた。彼が雇うことを許された使用人はすべてスパイだった。当然彼は抗議し、パーマストン外相 (Palmerston, Henry

John Temple, 3rd Viscount of 1784-1865) の親書を携えたレナード号 (Reynard) が来琉してベッテル

ハイムの待遇に関して申し入れを行うと、一時的に状況は改善したが、本質的に彼の宣教活動が許可されることは無かった。⁽²⁷⁾

彼を取り巻く状況が困難になるにつれ、次第に彼は言動を過激にしていく。⁽²⁸⁾ 具体的には、琉球王府宛に自分の境遇が改善されないならば、イギリス海軍の報復を呼ぶだろうと書面で抗議している。⁽²⁹⁾

こうした言動は、一時の憤激や、琉球王府向けの駆け引きの一環に過ぎないと言いつれぬ。というのも、彼は、本国のクリフォードらへの報告書である日記に、次のような記事を書いているからである。⁽³⁰⁾

(訳) …(前略)…我々はあなた方が無知な民族であることを知っている。そして、私たちの義務はあなた方の人間性の程度を増進することだとわかった。我々は、それゆえに、我々の国民が、宣教師であるか、技術者であるか、商人であるかを問わず、琉球人と交流を持てるように望む。琉球民族は、国民と判断される前にすべての点で学ばなければならぬ。そして、我々はこのようにして琉球王府が、琉球人と外国人の自由な交流を妨げるすべての、いかなる障害をも取り除くことを要求する。我々はまた、彼らに、すべての啓蒙された政府がするように、自身の国民に、おのおのの良心が命じるままに、いかなる宗教にも従うことを許すことを要求する。そして、今現在琉球においてキリスト教宣教師によって教えられている宗教に従ったいかなる人物にも、反

対することや、いわんや罰を与えることの無いよう要求する。

この記事は、一八五二年六月九日のものであり、琉球王府への自分の要求を、イギリス海軍軍人が代弁してくれることを夢想したものである。

この記事から分かることは、ベッテルハイムは「文明化したキリスト教国」のみに国家を名乗ることが許されると考えていたことである。琉球人はそれゆえに、イギリスの指導を受け、啓蒙されなければならない。琉球人はその「人間性の程度 (the scale of humanity)」を増進させねばならない、とまで酷評されている。また、一八五二年五月一六日には、軍事力を行使する意図を持たない軍人にできることは琉球の地には存在せず、「彼らが琉球の人々に、彼らがいまだ国家の態をなしておらず、彼ら自身の力では繁栄することができず、彼らがある側面では人間というよりは獣に近い存在であり、キリスト教世界は琉球の人々を憐れんで教師を派遣したこと、彼らのいかなる法も価値を持たず、自殺的なものであることを、琉球人たちに確信させない限り、」宣教の役には立たない、とベッテルハイムは言い切っている。^①ここに見えるのは、「文明的なヨーロッパが未開の人々を導かなければならない」という、ヨーロッパ文明中心主義的な思考方法である。さらに、一八五三年一月一三日の記事に、「キリスト教権力、キリスト者による植民地化、およびその政府、これらのきわめて偉大な地上における神の恩寵のもとにある宣教師の魂は、神に依り神によって成長」し、オーストラリアや

ニュージールランドにおいて神が勝利した、と書いている⁽³²⁾。ベッテルハイムにとって、植民地とはキリスト教宣教のための良好な土壌であったことがわかるだろう。より直接的に、彼は琉球の植民地化を訴えたこともある。照屋は、ベッテルハイムが『絵入りロンドン・ニュース』(Illustrated London News)に「琉球を植民地に」と題する一文を投稿したことを紹介し、その投稿文において「琉球に英政府の正当な保護のもと、五〇家族の英人を入植させること、琉球は地理上、日本本土と豪州、中国、米国との間に有利な距離にあり、交通・通信の要路にあると指摘していた。琉球へ入植すれば早晩、英国に繁栄をもたらすであろう。その要素は十分にある」とベッテルハイムが主張していたことを指摘している⁽³³⁾。

しかし、ベッテルハイムが琉球をイギリスの支配下に置くこと、端的に言えば植民地にすることを主張したからと言って、彼がイギリス帝国の利益の代弁者だったと断定することはできない。彼には、イギリス帝国の後ろ盾は、宣教に役立ってこそ、という意識があった。そして、彼は自分の宣教がうまくいくのであれば、必ずしもイギリスだけが琉球に圧力をかける必要はないとも考えていた。そうした彼の意識が端的に表れたのが次の史料である⁽³⁴⁾。

(訳) …(前略)…私はその近所に出かけた。そして、打ちひしがれ、年取った母の、彼女の息子の

死を悼む嘆きを聞いた。彼は二〇歳で、召使をしていた。彼の主人は病気の彼を母のところへ

四日前に家に帰らせていた。彼は昨晚亡くなり、すぐに埋葬された。私は尋ねた。「何故あなたのこのことで私たちに連絡をくれなかった？ この間の流感のとき、我々は兄弟のようにあなたの家族を助けたではないか。」その女性が涙ながらに言うには、「ご存知のように、どんな様、我々はあなたに連絡を取ることが出来ません。あなたの家の扉のところの護衛と、まさにあなたの召使が私たちの命を脅かすのです。」いまだ、キリスト教国家の諸政府が、援助の手を琉球に差し伸べるときが来ていないのか？ これよりひどい奴隷制が、世界に存在することが出来るのか？（傍線は筆者による）

この史料は、一八五一年五月一日に、病気で死んだ息子を持つ母が、監視の役人のせいでベッテルハイムの診療を受けられなかったことを嘆き、ベッテルハイムが義憤を表明している場面の記事だが、傍線部に注目していただきたい。琉球人に救援の手を差し伸べるのは、イギリスではなく、キリスト教の国々なのである。同様に、キリスト教徒を弾圧する琉球の法の撤回を迫るよう訴える翌日の記事にも、「キリスト教国家の諸政府（Christian governments）」の文字が見える。救済する主体が、複数形で表現されたことが、ベッテルハイムの認識を端的に表明している。彼は琉球がキリスト教圏に包含されることを望んだのであって、イギリス帝国の版図に組み込まれることはその手段でしかなかったということである。

また、琉球が日本の強い影響下にあることを確信するようになると、自らの宣教を成功させるために日本のキリスト教禁令を打破することを訴えるようになる。ベッテルハイムは、一八五二年九月一三日付の嘆願書で、イギリス議会に日本開国に向けた圧力をかけることを訴えている⁽³⁵⁾。しかし、必ずしもイギリスだけが日本へ圧力をかける主体として考えられていたわけではないことがこの史料からうかがえる⁽³⁶⁾。

(訳) 私の慎ましやかな意見では、宗教的な動機によるかどうかは人間の判断にほとんど関係ないことだが、トルコに対して福音への扉を開かせた政治家たちは、現に存在するすべての教会や宣教師団体よりも、名誉への熱情を見せていた。そして、キリスト教に関係する実際上の優位を獲得していた。そして、キリスト教世界が一致団結して立ち上がり、キリスト教国家の諸政府に働きかけ、日本に神と救世主の顔に投げつけられている法令を撤回させないならば、彼らのキリスト教への信仰は、実に、非常に冷たい職業上のものである。⁽³⁷⁾ (傍線は筆者による)

この記事は、トルコに対してキリスト教の布教を認めさせた事例を挙げ、日本に対しても当時と同様の熱意を見せることを期待するものである。この場合、日本に対してキリスト教を認めさせる主体となるのは、傍線部にあるとおり、「キリスト教世界 (Christian world)」であり、その意思を体现す

る「キリスト教国家の諸政府 (Christian governments)」であつて、必ずしもイギリスに限定されて
いない。⁽³⁸⁾

これらの史料に加えて、彼が琉球から出国したのち、イギリス本土の地を踏むことは一度としてな
かったことなどから、彼はイギリス帝国の臣民であるとの自己認識は希薄だったと考えられる。自分
の宣教を助けるキリスト教国家ならどこの国でも構わなかったことを考えると、むしろ彼にとってイ
ギリス帝国は、琉球宣教を成功させるための道具にすぎなかったのではないか。だとすると、帝国主
義者としてイギリスの利益を追求する意識は全くなかったといえるだろう。

しかし、それでは、先に紹介したような、政治的に過激な主張は、ベッテルハイムのどのような論
理によって支えられていたのだろうか。

第三章…ベッテルハイムの宗教的アイデンティティ

本章では、ベッテルハイムのキリスト教信仰のあり方を分析し、彼の思想が言説としてどのような
表出するに至ったかを論じる。彼の信仰は二つの核から構成されていた。すなわち、彼がキリスト教
信仰に目覚めるきっかけとなった福音主義と、彼自身がかつて抱いていたユダヤ教信仰である。彼の
宗教者としての特徴は、福音主義思想と、ユダヤ人として旧約聖書を重視する態度が混交するところ

にあるといえる。

第一節では、ベッテルハイムの福音主義者としての側面を論じる。ここでは特に彼の千年王国思想について言及し、彼の琉球宣教の思想的背景を明らかにする。すなわち、「神の王国」が地上で実現するとする思想に基づいて、彼は琉球での宣教の実現を「神の王国」建設への一歩とみなしたのである。第二節では、彼のユダヤ教からの改宗者としての側面を論じる。彼は琉球人がユダヤ民族だと考え、琉球を任地に選んだ。加えて、困難に直面した時、彼は本国の宣教本部に対して旧約聖書の記述を根拠に様々に訴えかけた。重要なのは、旧約聖書と新約聖書の関係について、彼は宣教本部の人々の解釈とは異なった特殊な見解を持っていたことである。彼にとってキリスト教徒であることと、ユダヤ人として旧約聖書を読みこなすことは矛盾しなかつたのである。第三節では、第一節、第二節で論じたベッテルハイムの信仰のあり方が政治的主張として具体的にどのようなに結実したかを分析する。つまり、琉球王府の宣教活動への妨害や、キリスト教徒への弾圧、現地で支配的な仏教や儒教、抑圧的な琉球社会の状況を宣教上の問題として取り上げ、キリスト教徒として政治的解決を主張したことを論じる。

第一節 「穏健な福音主義者」ベッテルハイム

「穏健な福音主義」とは、一九世紀前半のイギリスで支配的だった神学思想であり、世界全体での漸

進的な道徳の向上の果てに神が降臨するという立場をとる。この思想的立場に依拠する宣教手法としては、学校教育や病院の建設、貿易圏の拡大などによって異教徒たちの文明化した後に彼らをキリスト教に改宗させるといったものだった。⁽³⁹⁾ フレッチャーは、ベッテルハイムが福音主義者であると指摘している。しかし、その特徴として取り上げているのは、彼が琉球を自由貿易の枠組みに取り込もうと積極的に関与した点だけである。⁽⁴⁰⁾

ベッテルハイムが「穏健な福音主義者」だったことを証明するそれ以外の特徴として、彼が琉球で試みた宣教方針が挙げられる。ベッテルハイムは病院を開院したし、琉球王府に対し、英語や天文学、地理学の教授を申し出ている。⁽⁴¹⁾

加えて、彼はイギリスの他の宣教団体の動向にも関心を示していた。彼は英国国教会宣教会 (Church Missionary Society) の雑誌を中国の友人たちから送ってもらっており、日記のなかでも言及している。⁽⁴²⁾ 英国国教会宣教会は、一九世紀前半のイギリスにおいて「穏健な福音主義」の立場をとる宣教師たちを多数擁する宣教団体だった。⁽⁴³⁾

何より重要なのは、彼が「千年王国思想」を奉じていたことである。特に、「穏健な福音主義」の思想的背景となっていたのは、後千年王国思想であり、彼は後千年王国主義者の特徴を備えていた。

来琉する直前の中国大陸での記事が興味深い。彼は一八四六年三月一三日の日記に、「主イエス・キリストの来臨のとき、すなわち、すべての人間の務めが、疑いもなく、等しく行われる時を早めるこ

とが彼 (Mr. Fessenden : カルカッタに派遣されることになった宣教師) の喜びとなりますように。」とコメントしている。

ここで彼は、「キリストの来臨のとき」が「すべての人間の (神に対する) 務めが行なわれるとき」であるとしている。そして、その時を早めるために「彼」はカルカッタに布教に行くのだから、彼は人の営為が神の来臨に寄与することができると樂觀的な立場をとっていたことがわかる。これは、「神の来臨」の前に神の王国を人が建設できると樂觀的に考える後千年王国思想に合致した意見だと考へることができる。⁽⁴⁴⁾

さらに、ベッテルハイムの日本への関心が、琉球の背後から自らの宣教を妨害するものへの対抗心からだけではなく、彼の宗教的信条に根ざすものだったことが、次の史料から分かる。

(訳) … (前略) … 私は、彼らに、日本が福音のもとに導かれる最後の国であるから、世界全体での全てのものの復活を早めることは私の聴衆に非常に多くを負っていると語った。そして、主の偉大なる来臨を待ち望むすべてのキリスト教徒にとって、このことこそが日本への宣教事業を極めて重要なものにしていないと語った。⁽⁴⁵⁾

この記事は、琉球での辻説法において、聴衆に語りかける場面を描写している。すなわち、琉球人の

改宗者たちに、世界の救済への貢献を期待しているのである。ここで、ベッテルハイムは日本が福音をもたらされるべき最後の地であるとしている。その日本の宣教によって神による世界の救済が早まる、つまり人為によって神の来臨を導けると考えている点で、先に触れた事例と同様である。レナード号艦長と琉球王府の会談の成功を告げられたときも、彼は、「やがて日本と対面することができる。」そして、この世界最後の王国がキリスト教の影響下に入り、その時こそ主イエスが来臨し給う。」と記している。⁽⁴⁶⁾

ここまで私はベッテルハイムが後千年王国思想の立場をとると主張してきたが、彼は前千年王国思想の信奉者の特徴も備えていたことも指摘しなければならない。前千年王国思想とは、神の王国である千年王国がキリストの来臨によって実現するという思想である。

前千年王国主義者たちは、千年王国の建設は神意によってなされるものであり、その神意は戦争や災害などの形で現れると考えていた。そして、彼らはヨハネの黙示録で描かれていた光景を念頭においていた。⁽⁴⁷⁾ ベッテルハイムも、新約聖書のなかでもヨハネの黙示録を重要視する主張をしている。⁽⁴⁸⁾ また、琉球海軍伝道会の出資者に日本宣教の意義を訴える手紙の中で、彼はヨハネの黙示録の光景を描写した。日本が神の王国及びキリストとの接触を拒んでいるのは、「暗黒の王子 (Prince of Darkness)」が力を取り戻す前兆であるとベッテルハイムは指摘する。そして、彼は、聖書に書かれている通りに、「暗黒の王子 (Prince of Darkness)」が主の来臨に必要な神の王国の建設を邪魔しようとする

だろうと論じた。ここでベッテルハイムが念頭においている箇所は、ヨハネの黙示録の第二〇章であることは明らかである。⁽⁴⁹⁾

ただ、後千年王国思想の持ち主が「穏健な福音主義者」であるというのはあくまで傾向の問題で、前千年王国思想の持ち主が「穏健な福音主義者」であることもあった。⁽⁵⁰⁾ 彼がいずれの傾向の持ち主だったにしろ、ここで重要なのは、彼が琉球や日本におけるキリスト教宣教の成功が、神の王国の建設に必要不可欠だと考えていたということである。

そして、彼が千年王国主義者だったということは、現実世界において「自らの正当性」神の意志」が証明されると信じていたということでもある。⁽⁵¹⁾ それゆえに、ベッテルハイムは、困難に直面した時、妥協を図るのではなく、極端な政治的主張を展開することになる。

第二節・「改宗者」ベッテルハイム

冒頭で言及したように、彼はもともとハンガリー出身のユダヤ人だった。彼がキリスト教の信仰と出会ったのは、中東地域で軍医として従軍中のことだったとされる。英国国教会宣教会所属の宣教師ジョン・A・ゼッター (Jetter, John, A. 生没年不明) に出会い、彼らの指導を受けて改宗した。⁽⁵²⁾ 当時の英国国教会宣教会は中近東でのユダヤ人への宣教運動を積極的に展開していた。その意味で、ベッテルハイムは当時のイギリスの宣教運動の成果の一人といつてよいだろう。

彼は、改宗直後は中近東地区におけるユダヤ人への宣教を志しており、ロンドンユダヤ人宣教会へ宣教師として応募している。⁽³³⁾ この試みは受け入れられず、琉球海軍伝道会の募集に応募したのだが、ユダヤ人相手の宣教師になるという目的を捨てたわけではなかったようだ。彼の妻の回顧によれば、ベッテルハイムが琉球宣教を志したのは、もともと彼が東方へ移民し、失われたユダヤ十部族の行方に強い関心があったからだとされている。⁽³⁴⁾

実際に、彼は琉球人をユダヤ民族の末裔だと見なしていた。例えば、一八五〇年十一月四日の記事に、琉球の政体や農業的習慣と「ヤコブの祝福」を考え合わせて、彼らほどユダヤ十部族の性質を残している民族はいない、と論じている。⁽³⁵⁾

同様の言及は、一八四七年三月八日にも記録されている。⁽³⁶⁾ また、一八四六年九月二七日には、琉球の知識人との対話の中で、タルムードを髣髴とさせる発言があつたことを書き留め、⁽³⁷⁾ 琉球人もユダヤ人と同じように、贖いの概念を理解することが出来ると記述している。⁽³⁸⁾

彼が「琉球人Ⅱユダヤ人説」を論じた記事を次に引用する。

(訳) …(前略)…琉球人が何らかのかたちでイスラエルの一族と結びつき、縁付いている可能性を支持する私の論拠は、急速に増大しているようである。…消滅した民族の起源をたどるのは、風習、慣習及び言語からたどるのにしくはない。…琉球人の風習やしきたりは、それゆえ、中国

や日本のうわべの儀礼によって訓練されてきたにもかかわらず、彼らがユダヤ的な特徴の一つ、またはいくつかをただ保持してきたかどうか、この特異な民族の起源に関して我々の考えをひきつけ、思考させるに十分なものだろう。琉球人の間では、婚約に関する慣習が社会的な拘束力を持つているのである。女性は、ユダヤ人の場合と同じように、婚約の時点から花婿の妻と見なされるようになる。⁽⁵⁰⁾

「琉球人が何らかのかたちでイスラエルの一族と結びつき、縁付いている可能性を支持する私の論拠は、急速に増大しているようである。」この書き出しから、彼が「琉球人Ⅱユダヤ人説」を明確に論じようという意思が見て取れる。彼が観察する琉球人とユダヤ人の風習の類似性は、ユダヤ民族だった時代からの遺産として彼は理解していた。ベッテルハイムと同時期に琉球にいたフランス人神父の記録にも、ベッテルハイムからイスラエルの十部族について調べてくれないかと頼まれたという記録が残っている。⁽⁵¹⁾

こうした考えは、彼と琉球王府の関係が悪化した時期においても維持されたようである。一八五二年三月二七日には、ユナミという名の琉球人について言及し、彼の名がいかにもユダヤ人的であるとコメントしている。⁽⁵²⁾ 同年十二月一七日には、琉球人の女性が教養のある人を敬うことに触れ、信心深いユダヤ人の女性がタルムードの学者を援助することを立派な行為として捉えているのと同様であ

ると記事にしている。⁽⁶²⁾一八五三年二月二日には、琉球での新年を迎える支度の慌しさに触れ、ユダヤ人の「過ぎ越しの祭り（出エジプトを記念するユダヤ人の祭り）」のようだとコメントしている。⁽⁶³⁾これらの記述も、先に引用した記事から鑑みて、読者に説明するためにユダヤ人の風習にたとえるためというよりは、琉球人とユダヤ人の類似性を紹介する意図があったと考えられる。

もっとも、彼の「琉球人＝ユダヤ人」観は、琉球人への親近感を物語るだけのものではなかった。ベッテルハイムが「殉教者」と呼んだサチハマ（崎浜）という琉球人の死に関して、彼はサチハマに対する彼の父の強権が、「ほとんどまったたくユダヤ人だ」と述べ、「もしもユダヤ人たちに文明化の進歩がほとんど許されていなかったならば、同様のことが最近のエルサレム、プロディ、そのほか昔ながらのユダヤ人の強力な組織が残っている地域でもおこなわれていたかもしれない。」と論じている。⁽⁶⁴⁾

日記はクリフォードらに読まれることが前提だったため、自分のユダヤ教からの改宗者であるという経歴が琉球での宣教に有効であるかのような印象を持たせようとしたのではないかと考えることも出来る。しかし、次にあげる一八五二年十二月二三日の記事を見てみると、彼の「琉球人＝ユダヤ人」観が、単なる雇用主向けのパフォーマンスに過ぎなかったとは言い切れない。

（訳）私は、琉球の人々の心に、旧約聖書から続く歴史的証拠やキリスト教徒としての喜びを伝えることに関する力不足を嘆くことをやめた。私の一時的な説教において、アブラハム、ダビデなど

にまつわる歴史もしくは事跡への言及すらする時間がなかったのである。：通詞や護衛が我々の周りにとどまっている限りにおいて、私は旧約聖書に言及できたし、実際にしたりもした。そのため、この民族にはそういった知識を十分に持たせることができた。しかし、一体いかにして私はキリストの代わりにモーゼについて説教し、福音を伝える聖職者としての説教の代わりに歴史を語るができるだろうか。⁽⁶⁵⁾

この史料では、彼は琉球人に対して旧約聖書の内容を元にした説教をこれまで繰り返ししてきたことを述べている。前述したとおりに、琉球人は旧約聖書こそ失っているものの、ユダヤ人の風習は受け継いでいると考えていた。つまり、彼は琉球人に歩み寄るために、琉球人に「理解しやすい」旧約聖書を題材にして、キリスト教の教義になじませようとしたわけである。琉球滞在の終盤に差し掛かってこのような表明をするということは、翻せば琉球滞在中のほとんどの期間で彼は旧約聖書を使用した布教をしたということでもあるが、ベッテルハイムはこの記事の直後に、そうした宣教姿勢を反省している。彼は旧約聖書の内容に言及する時間があれば、その分新約聖書そのものを琉球の人々に説くべきだったとし、事実そうすることで琉球の人々の共感が得られたと考えている。それゆえに、これからは新約聖書の言葉だけを伝えるべきだ、と決心している。

もし彼が、「琉球人Ⅱユダヤ人説」を、自分の宣教師としての立場を有利にするためだと割り切って

主張していたのだとすれば、旧約聖書を通じてユダヤ人と琉球人の類似性に訴えかける宣教方法を見直すことを記事にして、自らのキャリアを危険にさらすようなことはしないでらう。特にこの日記は、自身の雇用主である琉球海軍伝道会の役員が最初に目を通すのだからなおさらである。つまり、ベツテルハイムの「琉球人ユダヤ人」言説を、単なる宣教会役員向けのパフォーマンスとみなすことは出来ない。

彼の宗教者としてのアイデンティティが、一般的なキリスト教徒のものとは異なっている自覚はあったようである。一八五一年十二月七日には、苦しみ不平を言うよりは、耐え忍び、許しなさいと福音書が教えていることは認めながらも、「それではダビデとともに祈ることが出来るキリスト教徒はいないではないか。」と反論している。彼は、日本に神罰を与えるために、神がキリスト教徒の軍勢を日本に派遣しますようにと祈ることが、キリスト教徒の務めとして間違っているとは思えないと主張した。その一方で自分の中に福音書由来の教えと、旧約聖書の教えが共存していると分析している。⁽⁶⁶⁾より直接的に彼が自身の信仰の独自性について表明したのは、一八五一年十一月二三日だった。

(訳) 私が他人とキリスト教徒としての倫理性の本質的な点で異なっているのではないかと考えると、き、しばしば私は不安になる。しかし、実際のところ私の慰めは、私が彼らの見解を受け入れたところで私が変わえられるところはほとんど無いし、それどころかそういったすべての意見は私に

とつて宗教上の信条と比べて取るに足りないということが分かった、ということである。そして、私は、よりよい確信が生じた際にはそれら全てを捨て去る準備を、そう、いわば待っているのである。私の精神は神のもとにある。私は神に、私のすべての点において忠誠を誓っている。そして、神が私に与えたもうた真理の理解のあり方以外のやり方で考えたり、話したりすることが私には出来ないのである。∴（私と他者が違うことは）私に考えさせるが、だからといって私は私の奇妙さゆえに責められているとは感じない。ラビのユダヤ人として育てられ、私は思索の習慣を身につけたが、これは実に野生的で、タルムード的な遠心力を持ち、そしていまだに、創意に富むものであり、全く役に立たないものではなかった。⁽⁶⁷⁾

この記事において、ベッテルハイムは自らの倫理観と一般的なキリスト教徒の倫理観が異なっていることを認めている。その上で、自分は神の教えに従っているのだから倫理観を変える必要がない、と論じているのだが、ここで重要なのは、彼がユダヤ教徒として受けた教育を誇っていることである。彼は自らの「ユダヤ教からの改宗者」というアイデンティティが、むしろ美質だと主張している。

このように、彼の琉球における宣教活動の動機には、彼のユダヤ人としてのアイデンティティが深く関わっていることが確認できる。そして、彼は信仰の面でも、旧約聖書を重視していたことが、彼の日記から明らかになるのである。

ベッテルハイムが琉球人への布教のなかで旧約聖書にたびたび言及したことについては触れた。これについて、彼は新約聖書の使徒たちの事跡に倣うためと説明しているが、彼が信仰上のアイデンティティとなる部分で旧約聖書を重視していたことが明らかになる記事を次に引用する。

(訳) 新約聖書と旧約聖書とが、救済の手段の性質のみならず地上における神の統治の精神及び道徳性の点で異なっていると考える人々は、ヨハネの黙示録が単に福音書の最後の部分であるというだけではなく、それ自体の中に「神の啓示」があるということ、神がイエス・キリストに与えた啓示であるということを感じておくといいたいだろう。そして、ヨハネの黙示録(が与える印象)は、重要な観点において、福音書の全体的な印象と、ちょうど福音書(の印象)が旧約聖書(の印象)と異なっているのと同様に、異なっているかもしれない。——ヨハネの黙示録は、福音書の最後の部分でイエスによって示された、(神の)力を引き受けたことを詳述したものであると見なすことが出来るだろう。それはちょうど福音書が犠牲として昇天する前のキリストに関する預言の詳述であるのと同様である。…(中略)…また、いくつかのキリスト教の信仰に関する重要な論題は、それらが旧約聖書を十分にほめかしてはいるものの、直ちにふさわしい重要性を獲得できずいたり、地上にいる間のキリスト及び使徒たちがキリスト教の純粋な精神が発展させたのとはほとんど反対の方向に向かったことを明らかにするものであるにもかかわらず、

「教会に印象付けていることも忘れてはならない。したがって、我らの主ご自身がユダヤ教の儀式を遵守していることは明らかであり、それは彼の使徒も同様である。…（中略）…神の智慧や寛大さは、新たな信仰の純粹さが、その神聖な本質に本来備わっていた特徴を次第に回復していくまでしばらくのあいだ大目に見ていたのである。」⁽⁹⁾（括弧内は筆者による）

以上の記事から分かるベッテルハイムの主張を分析してみよう。まず彼は、新約聖書と旧約聖書の違いについて論じている。彼はヨハネの黙示録に注目し、福音書が「神の啓示について書かれた部分」と「地上におけるキリストについて書かれた部分」に分けられると論じ、ヨハネの黙示録が新約聖書の福音書と異なった印象を与えるのは、旧約聖書が福音書と異なった印象を与えるのと同じ理由だと結論付ける。すなわち、「神の啓示について書かれた部分…ヨハネの黙示録、旧約聖書」、「地上におけるキリストについて書かれた部分…福音書」と分類したのである。

後半部分では、「地上におけるキリストについて書かれた部分」の解釈について議論している。ベッテルハイムはキリストがユダヤ教の法を守っていたことを指摘し、キリスト教信仰が広まるまではキリストもある程度当時のユダヤ教の習慣を黙認していたのだ、と主張した。つまり、ベッテルハイムはこの記事において、「神の啓示」が直接的にあらわれているのは旧約聖書及びヨハネの黙示録であると論じたに等しい。

第一節の内容を踏まえると、ベッテルハイムにとって、地上に実現するべき「神の国」とは、旧約聖書やヨハネの黙示録で示される「神の啓示」が貫徹する世界だったことがわかる。当然ながら、彼のこの意識は、彼の政治的言説に具体的に表明されることになる。

第三節・ベッテルハイムの政治的言説

本節では、第一節、第二節で論じたベッテルハイムの信仰のあり方が、彼の言説にどのように影響したかを論じる。

中国大陸に滞在していた時点では、ベッテルハイムは平和な宣教を志していたことには既に言及した。しかし、彼への琉球王府の監視が強まると、一八四七年五月二三には「剣なしに救世主が平和をもたらすことは無いというのはなんと真実だろうか。」と慨嘆している。⁽¹⁰⁾ 監視がより厳しくなると、言動も過激になる。一八五一年二月二三日には、聖書で描かれている戦争は神の意思にかなうものであったはずで、聖職者のために軍事的措置を取ることは禁じられていないはずだ、と訴えている。さらには、「邪悪な日本へ軍隊が派遣されることが決定されるよう祈っている。」と記述している。⁽¹¹⁾ より直接的に神への信仰を守るための武力行使は正しい、と論じたのは、一八五一年十一月一五日のことであった。⁽¹²⁾

彼の主張が明確に現れている記事を次に引用することにする。

(訳) 私は、磔刑や絞首台によつて殉教した人々を尊敬する一方で、真実のために鞘を払い、剣をその手に取つて地に伏した人々も非常に尊敬している。神が、その信者の死によつて栄光をたたえられることを望んでいることを、信者に明らかにするときはとあるのである。信者たちが神のために復讐するべく剣を抜くことを神が望むときというのがあるのである。私は、神の記録から、エフド、ギアオン、ダビデ⁽⁷⁴⁾らの名を削り落とすことは出来ない。…(中略)…本国で安楽に肥えた愚か者が平和を説くのだ!…(中略)…「主は戦士なり、主はその御名なり!」…(後略)…⁽⁷⁴⁾

この記事で復讐、及び信仰を守るための戦いを肯定しているのは、サチハマという改宗者の青年が、拷問の末に殺害された(とベッテルハイムが信じる)事件を念頭においているからである。つまり、この記事は琉球への軍事的報復を要求したものである。彼にとつて、琉球への介入が、宗教戦争の意味合いを色濃く含んでいたことが分かるだろう。同時に、彼が想起する軍事介入が、彼が重視していた旧約聖書を根拠にしていたことも重要な点である。また、一八五〇年十二月二九日に、トルコでのキリスト教徒の虐殺も日本でのキリスト教への改宗者への弾圧に比べれば何ほどのものでも無い、と主張していることも念頭に置くべきだろう。⁽⁷⁵⁾これ以外にも、自分と接触したせいで住居を追い出された琉球人に再会したときも、ベッテルハイムは神に復讐を祈っている。⁽⁷⁶⁾

このように、彼は宣教がうまくいかない状況を、武力によって打開することを主張し、それこそが神の意思にかなうという論理を展開している。「本国で安楽に肥えた愚か者が平和を説くのだ!」、この一節が本国の琉球海軍伝道会の役員が読む日記にかかれたことが重要だろう。この時点で本国とベッテルハイムの宣教方針が食い違いを見せていることが分かるからだ。というのも、クリフォードはベッテルハイムが見せた過激な宣教方法や主張に対して、自制を求めていた。彼は、清と英国の間で結ばれた南京条約では、キリスト教宣教が五港及びそこから一日で往来できる範囲に限られている点を琉球王府が指摘していることを知り、自重する意向を示していた。⁷⁷

また、一八五二年五月二日の説教では、武力によって強制的に異教徒を改宗させることは出来ない⁷⁸と認めつつも、キリスト教徒への迫害への抵抗としての武力の行使は正当であると論じている。

琉球の背後にいと考えられた日本も、ベッテルハイムの攻撃の対象となった。一八五一年七月二日、ベッテルハイムはヨーロッパ列強が日本に最終的には外国人を受け入れさせ、「古都エリコにユダヤの民が迫ったときのように」、神の恐怖が日本に落ちるだろうと論じている。⁷⁹

先述したジョージ・スミス主教 (Smith, George: 1815-1871) は、ベッテルハイムが「異国伝道に尽くしたパウロというよりは、モーセの後継者にして指導者であるヨシユアに似ている」と述べ、婉曲的に彼の特異な人格を評することで弁護しているが、それはベッテルハイムのこうした信仰を念頭に置いたものだったといえるだろう。⁸⁰

このように、ベッテルハイムは旧約聖書の記述を根拠にして、琉球や日本へのキリスト教国の政治的干渉を実現しようとした。その目的は一貫してキリスト教圏の拡大だった。いわば、千年王国思想に基づいて、世界のキリスト教化を実現するために、キリスト教国による政治的干渉は正当化されたのである。そして、彼は琉球滞在中に起きた様々な出来事を捉えては琉球への政治的干渉を繰り返して呼びかけた。例えば、一八四七年一月十二日には、琉球王府宛にしたためた手紙の中で、仏教や儒教は人工的な制度であり、人工的であるがゆえにそれらの宗教は誤っている。魂を見ることが出来ない人間が創った宗教であるがゆえに、魂について知らないのである。神のみが魂を創ることができ、それについての法を創ることができると論じている。⁽⁸¹⁾ また、一八五一年七月三日には、「儒教や仏教によって信仰されているものは、腐って悪臭の漂う死体、墓石、或いは木といった、動きや生命、魂魄を持たないものである。」と訴え、儒教や仏教が偶像崇拜だと攻撃している。⁽⁸²⁾ より直接的に、儒教は宗教ではないと琉球人に対し説教したのは、一八五〇年九月二九日のことだった。⁽⁸³⁾ また、一八五二年三月五日には、儒教が人間を動物のようにしか扱わず、人間に食べて死ぬ以上の人間性を認めていないと非難している。⁽⁸⁴⁾ こうした仏教や儒教に対して、彼は *Chinese Repository* に寄稿した記事において、神は今なお嫉妬の神であり、偶像崇拜の敵であるはずだと論じている。続けて彼は、レナード号来琉の直後に、仏教僧と儒教の政府が降参しているのだから、我々がおろかな寛大さを見せて彼らを復活させないように訴え、「我々は悪魔 (Satan) を鎖に少しの間つないだ後に解放するべきだろう

か？」と問いかけている。⁽⁸⁵⁾この記述から、ベッテルハイムが、イギリスの力で仏教や儒教を抑圧するべきだと考えていたことがうかがえるだろう。⁽⁸⁶⁾そして、こうした考えは、同時代の他の福音主義者たちの他宗教への眼差しと類似したものであった。彼らは、すべての人類の宗教が起源を等しくするものの、キリスト教以外の宗教は偶像崇拜に墮落してしまったという認識を持っていた。偶像崇拜に墮した信仰を持つ人々は、倫理的にも墮落しているとされた。自然、一九世紀中の福音主義者たちの他宗教への眼差しは厳しいものにならざるを得なかった。宣教師たちは、異教の地で、サタンの手先である異教徒の軍勢との精神的な戦いを演じた。そして、彼らの言辞には軍人らしい比喩的表現が使われることが多かった。⁽⁸⁷⁾ただし、ベッテルハイムの先ほどの言動の場合、比喩で儒教や仏教への抑圧を訴えていたわけではないことは、これまで紹介してきた彼の好戦的な言動から、明らかであろう。

一八五二年一月二三日の記事には、イングランドは暴君の圧制に剣を手にとって抵抗することで自由を勝ち取り、現在にいたるのだと論じ、自分も異教の暴君にどのように抵抗すべきだろうかと問いかけている。⁽⁸⁸⁾つまり、琉球への干渉は琉球人自身のためになるのだと論じているわけである。

彼の日記で繰り返し言及される主張のなかには、琉球における普通の人々の窮状を訴え、彼らを救うために琉球への政治的干渉を呼びかけるものがある。例えば、一八五二年一月七日の記事には、西洋医術と同じくらいに我々の信仰を琉球人が必要としていることに触れ、自己中心的なこの国の支配者を屈服させることがキリスト教徒の務めだと訴えている。⁽⁸⁹⁾同年二月一五日の記事で、琉球にはハ

ンセン病患者が非常に多いことを報告し、琉球が信仰のみならず実際のな支援も必要としていると論じ、自己中心的な王府を屈服させる必要性を訴えている。また、一八五二年五月一日の記事で、病人が役人の妨害を恐れて通院できなかつたために死んでしまったことを報告し、「キリスト教を奉じる国々が琉球に援助の手を差し伸べるときが、一体まだ来ていないのだろうか？」と訴えかけた。⁹⁰

これらの記事は、ベッテルハイムの医者としての立場から出た意見であるが、興味深いのは、琉球が「奴隸制を布いている国だと彼が主張していることである。ベッテルハイムは先に論じたように、琉球人ユダヤ人の末裔だと考えていた。そして、琉球人が日々の仕事に忙しく、自分の説教を聞く暇が無い状況を、エジプトのファラオが、奴隸に説教を聞かせるモーゼの邪魔をする様子と重ねている。⁹¹琉球王府の「奴隸制」に苦しむ彼らを救済することはキリスト教国の使命ではないか、と主張したわけだ。⁹²彼は、「余りにも奴隸として抑圧されているために、抑圧者に対して反抗しようとする出来ない人々を、キリスト教国がもつとも単純でもつとも聖なる倫理的な理由によって、解放しても構わないのみならず、しなくてはならない場合」ではないかと訴えている。⁹³

この窮状の背景には日本の存在がある、とベッテルハイムは考えていた。次に彼の思考が明らかにされている記事を紹介する。

(訳) 私は内科医としてのみならず、一人の人間として、一人のキリスト教徒として、神の観念が、

野蛮な日本の暴政と無知によって拭い去られてしまったことに哀れみを覚えることしか私には出来ぬ。こうした政權を転覆すること、もしくは彼らに与えられる健全な助言に従うように命じることだけがこの民族を救うだろう。そして、日本の政策を変えさせること以上に簡単なことも無い。：肥沃な大地のすべての生産物が、労働者たちに生きながらえることを許すだけの惨めになるほど少量を除いて、王府の腹に収まることはほとんど明らかである。：いつすべてのキリスト教徒たちがその觀念のなかの神をたたえ、多数を抑圧する少数を押さえ込むべきなのだろうか？　ここでの抑圧は、キリスト教化された専制国家におけるそれではない。完全に人間を獣のような存在に追いやってしまうものである。⁽⁹⁴⁾

ここでベッテルハイムは、日本のキリスト教禁令を背景に、キリスト教国に住む人々が味わったことの無いような抑圧に琉球の人々がさらされていることを指摘し、キリスト教国による日本・琉球への政治的干渉を呼びかけている。一八五一年十二月二日にも、彼は病弱な母子を見て哀れに感じ、こうした抑圧の元凶である日本への神の裁きを「キリスト教国家の諸政府」が下すことを訴えている。⁽⁹⁵⁾

ベッテルハイムがいわゆるイギリスにおける奴隷解放運動を念頭においてこのように主張していたことは、一八五二年五月二日の説教において彼が「黒人奴隷を守るためにキリスト教世界が武器を取った」と発言していることからうかがい知ることが出来る。⁽⁹⁶⁾ 第一章で言及したように、奴隷貿易廃止

運動の勝利は福音主義者にとつて甘美な記憶だった。そうした本国の人々の心性に訴えかけるロジックとして、「琉球人＝奴隸」の論理が採用されたと思われる。その意味で、ここでも彼の福音主義者としての側面が顔を覗かせている。

ベッテルハイムは人道主義に基づいた政治的介入を琉球、日本に対して行う様に求めたわけだが、彼と同時代の、中国宣教に関する世論を喚起する主張の中にも、アヘン貿易を奴隸貿易になぞらえて人道主義的な介入を訴えるものがあつた⁹⁷。その意味で、ベッテルハイムの戦術は、中国大陸の宣教師たちがとつた戦術と同質のものといえるだろう。

第一節で指摘したように、彼は千年王国思想の持ち主で、琉球のキリスト教化の試みは現実的に報われるものと信じていた。その一つが琉球の「奴隸解放」である。当時、福音主義運動の顕著な成果とみなされていた奴隸貿易廃止を念頭においた言説をベッテルハイムは展開していた。そして、彼が信仰上最も重要視したのが、旧約聖書や黙示録に示された「神の啓示」だった。琉球への軍事的介入も視野に入れた政治的干渉は、旧約聖書にある異教徒との戦争の記述から正当化された。つまり、当時主流だった福音主義信仰と、彼の持つユダヤ教からの改宗者というアイデンティティの奇妙な融合の産物が彼の政治的言説として表出したのだ。

結論

これまで紹介したベッテルハイムの主張は、現実には全く顧みられることは無かった。それは、山下重一が論じるように、当時のイギリス外相パーマストンの対清政策に集中するために、対日・対琉球政策に積極的ではなかったという要素もあつただろうし、彼の特異な人格の故でもあつたかもしれない。事実、一八五四年に来琉したペリー艦隊の士官の一人J・W・スパーディング (Spading, J. M.: 生没年不明) はベッテルハイムの気質が、宣教師としての仕事を成功させるにはふさわしくないと評している。⁽⁹⁸⁾ いずれにしろ、彼が直接琉球に遣した影響は、特にキリスト教化という点から見た場合、ほとんどなかったといつてよい。

だからといって、彼が歴史的な特異点として等閑視されてよいということにはならない。彼の半生は、当時の帝国で生じた様々な出来事に翻弄されたものとみなすことができるからだ。すなわち、彼は中東におけるイギリス帝国の軍事行動に軍医として参画する間にキリスト教の信仰に目覚めた。これは当時のイギリスの福音主義者が中東のユダヤ人改宗を大きな目標として据え、大々的な運動を展開した一つの成果である。ベッテルハイムが琉球に来たのも、東アジアに失われたユダヤ民族の末裔がいるかもしれないと考えた側面がある以上、こうしたユダヤ人改宗運動に影響されたといえる。そもそも琉球海軍伝道会自体が、イギリス帝国の東アジア政策の副産物だった。つまり、「宣教医ベッテ

ルハイム」は、イギリス帝国内部で生じた様々な活動の産物といえる。

こうした観点は、彼の琉球滞在中の特異な言説を分析するうえでも重要である。第二章で論じたように、彼にイギリス人としてのアイデンティティは希薄だった。にもかかわらず、彼の帝国主義的言説は当時としても受け入れがたいほど過激なものだった。一見矛盾する彼の言説を理解するには、彼の改宗者としてのアイデンティティを考慮に入れなければならない。すなわち、当時のイギリスで主流だった「穏健な福音主義者」としてのキリスト教信仰と、ユダヤ教からの改宗者としての信仰のあり方が結びついたうえで、琉球での経験を経て、彼の言説は醸成されたのである。

つまり、ベッテルハイムがキリスト教の信仰に目覚め、来琉し、そこで活動するに至るすべての段階で、彼はイギリス帝国での経験に多大な影響を受けていたといえる。換言すれば、彼の半生を通じて、私たちは当時のイギリス帝国内部の多様な活動が個人に及ぼした影響を具体的に分析することができる。その意味で、「宣教医ベッテルハイム」は、イギリス帝国の宣教運動の落とし子の一といえるだろう。

【注】

(1) 佐藤林平「伯徳令再説」『慶大日吉紀要』七号、一二三頁。: Kerr, G. H. *Okinawa: the history of an Island*

people. Rutland and Tokyo 1958. pp. 280-2.

- (2) カール・ギュツラフはプロイセンで生まれた。一八二一年にベルリンのイエニケ宣教師学校に入学している。一八二六年に牧師として叙任を受け、同年にオランダ宣教師協会の代理人としてオランダ東インド会社に派遣されている。翌年には中国人への宣教活動を開始、さらに翌年には独自の宣教団体を立ち上げた。活動の場を中国に移すと、イギリス商人たちに語学能力を買われ、彼らと協力するようになった。のちにはアヘン貿易に批判的な態度をとるが、彼は当初アヘンの密貿易をキリスト教布教のための唯一の機会だと考えていた。彼の著した *Journal of Three voyages along the coast of China in 1831, 1832, 1833* (1834) は、西洋の政治、商業、宗教の分野での中国への関心をかきたった。R. G. Tiedemann, 'Gützlaff, Karl Friedrich August (1803-1851)', *Oxford Dictionary of National Biography*; Oxford University Press, 2004
[<http://www.oxforddnb.com/view/article/54362>, accessed 3 Dec 2012]

- (3) Loochoo Naval Mission (LNM), *Report of the Loo-Choo Naval Mission, for 1848*, London 1849, pp. 12-6.
(4) LNM, *Report of the Loo-Choo Naval Mission, for 1849-50*, London 1851, pp. 12-20.
(5) LNM, *Report of the Loo-Choo Naval Mission, for 1850-51*, London 1852, pp. 16-23.
(6) LNM, *The Seventh Report of the Loo-Choo Naval Mission, for 1851-1852*, London 1853, pp. 22-32.
(7) LNM, *The Eighth Report of the Loo-Choo Naval Mission, for 1853-1854*, London 1855, pp. 24-35.
(8) こうした表記は、ベッテルハイム研究の第一人者である照屋善彦の著書のタイトルにも見られる。C. 照屋善彦『英宣教医ベッテルハイム——琉球伝道の九年間——』人文書院、二〇〇四年。

- (9) A・P・シ・ヘンキンス編『沖縄県史 資料編21—The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845—54 Part 1』沖縄県教育委員会 二〇〇五年。四頁。(公録『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 1』(以下略)) : Cf. Bull, Earl R., "Trials of the Trail Blazer, Bettelheim", *The Japan Evangelist*, Tokyo 32:2, pp. 51-59.
- (10) Kerr, G. H., *op. cit.*, p. 288.
- (11) Cf. 照屋善彦『英宣教医ベッテルハイム——琉球伝道の九年間——』人文書院、二〇〇四年。
- (12) Cf. Stanley, Brian, *The Bible and the Flag: Protestant Missions and British imperialism in the nineteenth and twentieth centuries*. Leicester 1990.
- (13) Cf. Porter, Andrew, *Religion versus Empire?: British Protestant Missionaries and Overseas Expansion, 1700-1914*. Manchester 2004. (公録 *Religion versus Empire?* (以下略))
- (14) Idem., "Religion and Empire: British Missions since c. 1750", in Kondo, ed., *State and Empire in British History*. Tokyo 2003, p. 213.
- (15) Idem., *Religion versus Empire?*, p.13; do., "Religion and Empire: British Missions since c. 1750", in Kondo, ed., *State and Empire*. pp. 209-212.
- (16) 稲垣春樹「帝国と宣教——一九世紀イギリス帝国史における宗教の復権——」『史学雑誌』、一二一：六、七

- (17) Cf. Hilton Boyd, *The age of atonement: The influence of Evangelicalism on social and economic thought, 1795-1865*. Oxford 1988; Elbourne, Elizabeth, *Blood in the Cape Colony and Britain, 1799-1853*. Montreal and Kingston 2002. p. 45.
- (18) Harrison, J. F. C., *The Second Coming: popular Millenarianism 1780-1850*. London and Henley 1979. p. 4; 18世紀末、19世紀初頭の欧陸じ、イギリスには千年王国思想が根付くようになった。Oliver, W. H., *Prophets and Millennialists: The uses of Biblical prophecy in England from the 1790s to the 1840s*. Oxford 1978. op. cit. p. 18.
- (19) Stanley, op. cit., pp.58-61; Oliver, W. H., *op. cit.*, p. 13.
- (20) Porter, "Religion and Empire: British Missions since c. 1750", p. 209.
- (21) *Ibid.*, p. 202.
- (22) *Idem.*, "The Empire and the World", in Matthew, Colin, ed., *The Nineteenth Century: The British Isles: 1815-1901*. Oxford 2000. p. 148. (次巻 "The Empire and the World" 参照)
- (23) 一八四〇―六五年までの「聖俗両面での文明化を目指す宣教方針は結晶化した」。*Idem.*, "An overview. 1700-1914", in Etherington, Norman, ed., *Missions and Empire*. Oxford 2005. p. 53. (次巻 "An overview. 1700-1914" 参照)
- (24) Porter, *Religion versus Empire?*, p. 73. pp. 200-202, pp. 211-212.

- (25) Fletcher, Robert S. G., "Returning kindness received? Missionaries, Empire and the Royal Navy in Okinawa, 1846-57", *English Historical Review*, 125: 514, pp. 630-631.
- (26) A・a・シモンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part II』、二〇〇頁。香港滞在時でも彼は聖書を「神の剣」と呼び、自身を比喩としての神の兵士になぞらせていることが分かる。同書 四一頁。これが一八五一年三月二日になると、「単なる比喩としてはない信仰の兵士」を自任するようになる。同書 四七八頁。
- (27) 詳細は照屋前掲書を参照。
- (28) 自分たちの苦境を訴え、イギリス政府に保護を求めるような記事も書かれてくる。Bettelheim, B. J., "Letter from B. J. Bettelheim", *The Chinese Repository*, Vol.14, Nos.1-2, (Jan.-Feb. 1850), p. 87.
- (29) 沖繩県沖繩史料編集所前掲書 五五三、五七七、五八一、五九三―六頁。
- (30) 該当箇所の英語原文は次の通り。

"We know you are an ignorant nation & find it our duty to advance you in the scale of humanity. We wish, therefore, our subjects to hold intercourse with the Loochooans, whether they be missionaries, artisans or merchants. The Loochooan nation has need to learn in every respect before it can be pronounced a nation. And we hereby order that the Loochooan government remove any & every obstacle which would prevent free intercourse between Loochooans & foreigners. We also order them to do as all enlightened

governments do, & let their subjects follow whatever religion their own conscience tells them to follow, & never to venture to discountenance & much less to punish any man for following the religion now taught in Loochoo by Christian missionaries." A・P・シエンキンス編『沖縄県史 資料編』—『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 2』沖縄県教育委員会 二〇一二年 一三〇頁。

(31) 同書 一二四頁。この記事はスフィンクス号への失望を表明したものととして捉えるべきだろう。

(32) 同書 一〇頁。

(33) Bettelheim to the *Illustrated London news*, Sept. 28, 1852, Copied Diary of Bettelheim, 昭徳善堂前掲書に引用 一三二頁。

(34) 該当箇所の英語原文は次の通り。

I went there to our neighbour & heard from the distressed aged mother of the deceased that her son, aged 20 years, had been servant to a man, who four days ago sent him home to her sick, & he died last night & was immediately buried. To the questions: "Why did you not inform us of your case? Have we not brotherly assisted your family during the late epidemic?" The woman with tears answered: "You know, sir, we cannot send to you, the guards at your door & your very servants would bring us in danger of life." Is it not time as yet for Christian governments to lend an aiding hand to Loochoo? Can there any worse slavery exist in the world? A・P・シエンキンス編前掲書 一一六頁。

(35) F. O. 17, Vol. 195, Bettelheim to Palmerston, Napa, 19. Sept. 1852.

(36) こつでミッテルハイムが想定していたのは、イギリスとアメリカだつたようである。彼はチャイニーズ・レボリューションに寄稿した記事の中で、「イギリスとアメリカの船を招き入れるために努力を惜しんではならない」と主張している。Bettelheim, B. J., "Letter from B. J. Bettelheim", p. 86.

(37) 該当箇所の英語原文は次の通り。

In my humble opinion those politicians who – // whether from religious motives or not, it little concerns the human judge – have opened Turkey to the Gospel, have shown more zeal for the honour [of] & gained more practical ecclesiastical advantage for the cause of God than all the churches & missionary societies in existence. And as long as the Christian world does not unanimously rise to demand from Christian governments to compel Japan to revoke its decrees flung into the face of God & the Redeemer, their Christianity is a very cold profession, indeed. A・P・ジョンキーンズ編前掲書 一六四―一五頁。

(38) 彼が「キリスト教国」として思い浮かべていた国のなかには、カトリックのフランスも含まれていたようである。LNM, ed., "Extracts from the Journal of the Society's Missionary, Dr. Bettelheim, 1850-1852", in *Report of the Loo-Choo Naval Mission, for 1850-1852*, London, 1853, p. 17.

(39) Porter, *Religion versus Empire?*, pp. 34-5.

(40) Fletcher, *op. cit.*, pp. 620-1.

(41) Bettelheim, B. J., "Letter from B. J. Bettelheim", p. 36.

(42) A・P・シエンキンス編前掲書八頁。

(43) Cf. Porter, *Religion versus Empire?*

(44) A・P・シエンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part Ⅰ』、四三-四頁。

(45) 該当箇所の英語原文は次の通り。

I tell them, as Japan is the last nation to be brought under the Gospel, it greatly depends on my hearers to hasten the universal restoration of all things. And this indeed should make missionary enterprise for Japan of extraordinary importance with every Christian who longs for the glorious appearing of his Lord. 同書 四八三頁。

(46) LNM, ed., "Extracts from the Journal of the society's Missionary", p. 8.

(47) Porter, "An overview, 1700-1914", p. 55.

(48) A・P・シエンキンス編前掲書 六八六-六七頁。

(49) 同書 三二八頁。…この箇所は前千年王国思想の持ち主にとっては特に重要なところだった。Harrison, J. F. *C. op. cit.*, p. 7.

(50) Porter, *Religion versus Empire?*, p. 34; キリストの再臨によつて神の王国が建設されると考える前千年王国

思想の持ち主が宣教活動を推進するのは一見矛盾するが、彼らもできるだけ多くの罪びとたちが福音に触れられるように宣教範囲を拡大することを望んでいた。Porter, "An overview, 1700-1914", p. 55.

- (15) Oliver, W. H. *op. cit.*, p. 19.
- (16) Bull, Earl R., "Trials of the Trail Blazer, Bettelheim" *The Japan Evangelist*, vol. 32, no. 3, pp. 87-93.
- (17) Kerr. *op. cit.*, p. 281.
- (18) Bettelheim, Elizabeth M., Testimony of a Missionary's wife. Being a brief Narrative of the Loo Choo Naval Mission. As viewed during Eight years residence and labors at Napakiang. Addressed to English Women. n. d. Handwritten. The Bull Collection, pp. 119-20, 照屋善彦前掲書に引用二一三頁。
- (19) A・P・ジェンキンス編前掲書 四〇一頁。
- (20) 同書 二一六頁。
- (21) 同書 一五三頁。
- (22) 同書 三九八頁。
- (23) 該当箇所の英語原文は次の通り。

My stock of arguments supporting the possibility of the Loochooans being somehow connected & allied to the house of Israel seems rapidly to increase. ...Genealogies of extinct nations can scarcely be better traced than from customs, habits & language. ...Loochooan customs & usages, therefore, though trained with a

- Chinese or Japanese varnish, if they but preserve a striking Jewish feature or features, will suffice to arrest our minds & put in upon thinking as to this peculiar nation's origin. There is among the Loochooans the custom of betrothing in full vigor. the woman is considered as the wife of the bridegroom from the time of the betrothals as well as it was among the Jews. 同書 二二六—七頁。
- (60) フォルカード著、中島昭子／小川早百合訳『幕末日仏交流記』中央公論社、一九九三年、一五五頁。
- (61) A・P・シエンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 2』、七九頁。
- (62) 同書 一三九頁
- (63) 同書 三二三頁。
- (64) LNM, ed., "Extracts from the Journal of the society's Missionary", p. 58; A・P・シエンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 1』、431頁。
- (65) 該当箇所の英語原文は次の通り。

I have ceased to mourn over my inability to feed such minds with historical evidences & Christian comforts flowing from the O.T. I never have time to enter on the history or even occasion to mention the names of Abraham, David &c. in my ambulatory sermons... As long as we had the todzies & guards around us, I could & did often enter on O.T. ground, & a good stock of such knowledge is abroad among the nation.

But now, how can I venture to preach Moses instead of Christ, or give a history instead of preaching as minister of the Gospel? A・P・シ・ハンキンズ編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 2』' 2000-1頁。

- (68) A・ル・シ・ハンキンズ編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 1』' 160四頁。

(67) 該当箇所の英語原文は次の通り。

I feel often uneasy when considering I differ on some essential points of Christian morality from others. But my consolation is in practice I could alter little though I held their views, & further that I am persuaded all such opinions do not amount with me to a creed & I am ready, yea and as it were waiting give them up when better conviction arise. I keep my mind under God. I owe him sincerity in all my ways, & cannot think or speak otherwise than he gives me the apprehension of truth...It sets me a thinking, but I feel not condemned for all my strangeness. Brought up a rabbinical Jew, I got a habit of speculativeness, wild & Talmudically centrifugal indeed, still inventive & not altogether useless. 同書 五八八頁。

- (68) A・P・シ・ハンキンズ編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 2』' 1150頁。

(69) 英語原文は次の通り。

They who think the N.T. differs from the O.T. not only in the nature of the means of Salvation but also as to the spirit & morality of the divine government on earth will do well to remember that the Apocalypse is not only the last part of the Gospel but a "Revelation" in itself, the revelation of Jesus Christ which God gave unto him, & it may differ in "an important respect from the general impression of the Gospel, just as the Gospel differs from the O.T. - The Revelation of John may be viewed as an amplification on the assumption of power by Jesus mentioned at the end of the Gospels, just as the Gospels are an amplification of the prophecies gone before concerning Christ as sacrifice... (中略) ...It must also be remembered that several important topics in connection with the Christian faith, though sufficiently hinted at in holy writ did still not acquire their due prominence at once, yea and appeared during the life of Christ on earth & of his apostles to tend in quite a contrary direction from what the genuine spirit of Christianity developed, impressed on the consolidated Church. Thus, it is evident our Lord himself observed the whole Jewish ritual, his apostles likewise: ... (中略) ...Divine wisdom & indulgence connived for a season till the purity of the new faith assumed gradually the renovated features inherent to its divine nature. 同書 六八六―六七頁。

- (70) A・P・シホハキハス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845 | 54 Part 1』 二四三―四頁。

- (71) 同書 四七五―六頁。

(72) 同書 五七九―八一頁。

(73) エフド、ダビデ、ギデオンは異教徒との戦いにおいてイスラエルを守った神話上の英雄である。ピーター・カルヴォコレッシ著、佐柳文男訳『聖書人名事典』教文館、1998年、四八―九、五八―九、八四―五頁。

(74) 英語原文は次の通り。

While admiring those who fell martyrs on stakes & scaffolds, I certainly admire those who fell, the sword in the hand when unshathed for truth. There are times when God places his servants so as to make it apparent he desired to be glorified by their submissive death, & there are again times when he desires his servants should draw the sword of vengeance for him, I cannot scratch out the names of Ehud, Gideon & David, & others from the inspired Record... (中略) ...Foolish men, Fattening in ease at home preach peace! ... (中略) ..."The Lord is a man of war, the Lord is his name!" 同書 四一四―五頁。この引用した箇所直後には、人間の高貴な感情の調和を尊ぶのは「間違った通説 (mistaken orthodoxy)」だと非難している。

(75) 同書 四三〇頁。

(76) 同書 五一―頁。

(77) Kerr, G.H., *op. cit.*, p. 291.

(78) A・P・ジェンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 2』、六八四頁。

(79) A・P・ジェンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part

二、五二六頁。…古都エリコとはヨルダン低地の都市。エジプトを脱出したイスラエルの民がヨルダンに渡り、エリコの城壁を一日一周し、七日目に角笛を鳴らすと城壁が崩れたという故事に由来する。ヨシユア記 六：一―二七。

(80) ジョージ・スミス著、山口栄鉄／新川右好訳『琉球と琉球の人々——琉球王国訪問記』沖縄タイムス社、二〇〇三年、九頁。彼は続けて、ベッテルハイムがもし温和で彼ほど我慢強くない人物であれば、既に夭折するか撤退してしまっているはずだと論じ、彼を擁護している。

(81) A・P・ジェンキンス編前掲書 二七一頁。同様の議論は一八四七年二月二二日の記事にも見られる。同書 二二二頁。

(82) 同書 五二八頁。

(83) 同書 三三三頁。

(84) A・P・ジェンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 二』、三四五頁。

(85) Bettelheim, B. J., "Letter from B. J. Bettelheim", p. 33. ハンもまた、ヨハネの黙示録を髣髴とさせる記述である。

(86) ベッテルハイムは、琉球で支配的なのは仏教よりも儒教であると考えようになった。役人たちとの対話の中

で、彼らが仏僧や仏教への反感を感じ取ったからである。A・P・ジェンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part I』一四一頁。：その結果、彼は仏教やそのほかの迷信のほうに儒教より好ましい、と考えるようになった。同書 六一六頁。

(87) Stanley, Brian, *op. cit.*, p. 64. スタンリーは、偶像崇拜への十字軍遠征としての宣教師たちの活動が、帝国主義的であると解釈されうる態度や反応を生んだということを指摘している。Ibid., pp. 64-5.

(88) A・d・ジェンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 2』一〇頁。

(89) 同書 二頁。

(90) 同書 一一六頁。

(91) A・d・ジェンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 2』一八一頁。

(92) ユダヤ人の解放が千年王国の建設のための重要な要素であるという言説が、この当時流布していた。Oliver, W. H., *op. cit.*, p. 44.

(93) A・P・ジェンキンス編前掲書 一二二頁。

(94) 英語原文は次の通り。

…(前略)…I did what I could, not only as physician but as man & Christian, plying the image of God.

effaced by the rude hand of Japanese tyranny & ignorance. Nothing but upsetting such governments or commanded to them to obey wholesome counsel given will ever help this nation. And nothing, too, is easier than to change Japanese policy. … (中略) … It is most certain the whole produce of the fertile landscape, with exception of the miserable pittance on which the labourer is allowed to live, runs into government's belly. … (中略) … When shall Christendom rise to honour God in his image & put down the few who oppress the many? It is not here oppression like in Christianised despotic states; it is here a complete merging of man into the brute creation. 同書 九五頁。

(95) A・P・シエンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 二』、五九八頁。

(96) A・P・シエンキンス編『The Journal and Official Correspondence of Bernard Jean Bettelheim 1845-54 Part 二』、六八四頁。

(97) Porter, *Religion versus Empire?*, p. 203-5.

(98) 山下重一「ベッテルハイム、モアトンの琉球滞在とイギリスの対琉球政策」『國学院法学』四〇：四、三七八—一九頁。

(99) Sparding, J. W., *The Japan Expedition: Japan and Around the World, an account of three visits to the Japanese Empire, with sketches of Materna, St. Helena, Cape of Good Hope, Mauritius, Ceylon Singapore, China, and*